中高生とともに差別と闘う

『鳴らない電話』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

まず身近な家族から

前号の続きです。

差別電話がかかってきたタクヤは、シンジに相談の電話をかけます。徹底して語り合う人権学習を積み重ねてきた彼らが出した結論は、「親に話す」でした。その提案はシンジがしました。部落問題学習のなかで、一番の理解者であり協力者は、身近な家族であるべきだ、ということを学びとっていたからだと思います。

当時、私たちは、家族と部落問題について語り合っていくことが、自分の差別意識と向き合い、部落差別解消につながるのであって、そのことについては部落出身であるかどうかは関係ないということをよく話していました。だから、その結論に至ったのだと思います。

夕食時、タクヤは家族に語りかけます。

＊

親に言った。「何でも困ったことを話しできるのが家族じゃない」と言ってくれた。うれしかった。

でも、くやしかった。絶対卑怯だ。言いたいことだけ言って電話切って。ムカつく……。

母が言った。

「そんなことを言う人は悲しい人間なのよ。そんなことに負けたらあかん。世の中、そんな人ばかりじゃない。落ち込んだら負けよ。」

＊

お母さんの言葉は、まるで自分に言い聞かせているようにも聞こえます。

実はお母さん自身、我が親から部落差別を理由に結婚を反対され、飛び込むように部落にやってきた方でした。そんななかで、「悲しい人」にも出会ってきたのでしょう。でも、自分を支えてくれる多くの人にも出会ってきたからこそ出た言葉だと思います。

とはいえ、我が子が差別を受けるということは、我が身を切られる以上に切なく、苦しく、悔しい思いではなかったでしょうか。

鳴らない電話

タクヤは夕食後、ある行動をします。

＊

ボクは、ずーっと電話を待った。今も待ってる。でもかかってこない。その人は差別してるのに。

会いたい。でも、これが部落差別なんだ。ボクは開き直ってしまいそうになる。

ぼくの解放運動。本物の解放運動。差別者の意識を変えるのが運動なんだとボクは思っている。いろんな子にこのことを話していこう。

＊

両親に話した後、タクヤは深夜遅くまで、電話機の前で待ち続けたというのです。

＊

もしかしたらまたかかってくるかもしれない。もしかかってきたら、今度こそは、言ってることのおかしさを分かってもらおう。部落差別のおかしさを伝えよう。

＊

かかってくるはずがありません。常識的に考えれば。それでも彼は、鳴らない電話機の前で待ち続けたというのです。深夜まで。その健気さ。一途さ。そんな思いにさせたのはいったい誰だ！と、激しく憤る気持ちが胸いっぱいに広がり、ぶつけようのない怒りが爆発しそうになります。

一度は、「誰にも言うまい」と思ったタクヤは、この記録を生活ノートに綴り、翌朝、担任教員に提出します。そしてこの事実は教職員集団の知るところとなり、学習資料として、学年全体で学び合うことになったのです。

罪の意識のない問題性

話をもとに戻します。中学生集会でのシンジの語りは、タクヤにかかってきた差別電話の話から、自分が就職した職場で起きた差別へと移っていきました。

＊

社会人になったときも、やっぱりそういうのがありました。二十年ぐらい前かな。会社で落書きをされたりね。「○○○（賤称語）はこれを触るな」と、ボクたちが使う筆箱とかペンケースとかに書かれてたりするわけです。

目の前にしてやっぱ腹立たしかったし、中学校のときにしっかりと勉強したつもりだったので、「そういうのはいけない」という話をするわけですけど、やっぱ心底悔しかったし、なんで生まれた所だけで差別されなアカンのかっていうのは、すごくありました。

＊

差別落書きをした人物を私は知りませんが、以前私が勤めていたA中学校の出身だったことを、後になって聞きます。ショックでした。

私がいたころも同和教育をしてなかったわけではありませんでした。でもそれは、「したつもり」になっていただけなのかもしれません。同和教育・人権教育に取り組めば取り組むほど、昔の取り組みのあまさばかりが浮かんできます。

十二年という歳月を経て、再びA中学校に赴任した当時の、教職員の部落問題への意識を思い返したとき、「差別落書きをしてしまうかもしれない」と思えてしまいました。しかし当然のように、そのとき勤めていた教員には罪の意識はありません。そこに問題性を強く感じます。

シンジは、部落差別はなくなってないということを、メッセージとしてはっきり伝えたかったわけです。もちろん、知っている中学生にはしっかり入っていったと思います。しかし彼が伝えたかった本当の相手は中学生ではありませんでした。

イラスト　中島 亜唯